社　会　科

子どもの豊かな気づきや感じとりを育む社会科の支援

1　社会科で育む「豊かな感性」をもった子どもの姿

(1)　社会科で育む「豊かな感性」

社会科学習で育みたい感性（気づきや感じとり）とは，次の３つであるととらえている。

○社会的問題を解決する（した）人間の営みにかかわる感性

○社会的問題の解決に見られる（みられた）人間の知恵にかかわる感性

○問題を自分なりに解決しようとする意志決定や社会参加に関する感性

これらは，人間の営みへの共感的な感性であり，共感的に知恵にふれ，考えることによってより深まっていくと考えている。例えば，アイガモ農家や牡蠣養殖業者などの営みに，共感し，その知恵に触れるなかで，「私ならこうする，こう考える」という具体的な意志決定や「私も実際にやってみよう」という社会参加への気づきや感じ方が培われていくととらえている。

(2)　社会事象との関わり方の２つのタイプ

社会事象と子どもとの関わり方には，次の二つのタイプが見られる。

○「何とかなる，どのようになっているのかな。」と構えて学ぶタイプ

○「何とかしなくては，どのようにしたらよいか。」と構えて学ぶタイプ

前者は，第三者的な学び方であり，現状の理解，静的な知識の集積にとどまってしまいがちである。生きて働く知恵にしていくためには，後者の現在の仕組み理解をふまえた共感的な理解のできる学び方にしていくことが大切である。

(3)　「豊かな感性」をもった子ども像

本校で育みたい豊かな感性を持った子ども像を示すと次のようになる。

> 社会的状に見られる（見られた）問題を解決しようとする人間の営みに共感し，問題解決に見られる（見られた）人間の知恵に触れ，社会の一員として自覚をもって自分なりに社会に働きかけていこうとする（意志決定，社会参加する，など）子ども

2　豊かな感性を育む社会科学習づくり

(1)　学習材の開発

自分なりに，問題を解決し社会へ働きかけていこうとする子どもを育むうえで大きなはたらきをしているものが学習材である。その場合の学習材は，教え，分からせるためのもの（教材）でなく，子どもの共感的な問いを引き出すものとして，開発されることが大切である。また，問題を解決する人間の営みが見える具体的な内容を開発することが大切である。

学習材のもつ要件としては，次のようなことが考えられる。

① 子どもに身近な地域素材，日常素材を活用した学習材
- 自ら見て，調べ，考え，試してみることのできる自分なりの働きかけができる素材。

② 問題を解決する営みが含まれた学習材
- 具体的な人物，主張が明らかであること。
- 生き方など，よりよく生きようとする営みが発見できる素材。

③ 魅力的で新鮮な教材
- ほどよい抵抗感があり，意外性や驚きなど心情のゆれを起こすこと。

(2)　問題解決的な学習過程

子どもたち一人一人の気づきや感じ方を生かし，自分なりの学び方や解決の仕方などをかつみ，自分なりに社会に働きかけていくことのできるようにするためには，問題解決的な学習過程を設定していくことが必要である。

本校で取り組んできた，「めあてを持つ，→めあてを追求する→振り返る」というめあて追求の過程を基本として，さらに，「気づく，感じる→考える→表現する→振り返る」というステップを位置づけることで，自分なりの解決やはたらきかけに生きる力が一層育まれていく。なおこのようなステップは，一単位時間としてではなく，一単元や小単元，日常の実践活動を含めた単位で設定していきたい。その基本的な学習ステップとそこで求められる支援は，次頁（p62～63）の表の通りである。

(3)　人間の営みに迫る体験的活動の場の重視

問題解決での人間の営みへの共感や知恵の感得は，「問題を解決しようとする目的・願いを実現するために，どのようにするか（したか」という手段」を問うことを通して得られる。そのための体験的な活動としては，次のような主体的に関わる行動的な際が考えられる。

① 実体験（解決の営みを実際におこなってみる）

② 追体験的活動（解決の知恵や営みをまねて行ってみる）

③ 触れ合い活動（人々と触れ合いのある活動）

(4) お互いのよさに気づき高めあう評価の工夫

自分や友だちの気づきや感じ方のよさを自ら振り返る自己評価や相互評価の工夫と教師による見取りと励ましを行う場の設定と工夫を具体的に考えていくことが大切である。

3 今後の課題

社会参加といった実践的な活動に関わる子どもたちの気づきや感じ方を育成していくためには，次のような課題が残される。

① 社会参加に関わる感性を育てていく場の設定を年間指導計画の中で検討し，時数の重点化や弾力的な運用をしていくことが必要である。

② 課外活動及び社会参加に関わる自己評価や教師評価の検討

子どもの豊かな気づきや感じとりを育む学習ステップと支援

学習のステップ	めざす子ども像	支援活動
〈日々の学習への準備〉		自己学習を成立させていく方向で行う。 ○ 学習内容に対する子どもの生活経験，とらえ方，既習事項を個別に把握する。 ○ 「出会いと発見」のある学習材の開発（95年度紀要参照）
〈めあてをもつ〉 社会事象・事実と出会い 驚き・矛盾・意外性・関心 知的葛藤・知的好奇心・疑問などが生まれる活動や体験 ↓ 自分なりの問題を見つける 「どのようになっているかなぜなのか」という知的な問題。「どうしたらよいか」という実践的な問題。 ⇩	○ 活動や体験の中で素朴な思いや疑問をもつことができる。 ・これまでの自分の体験や生活経験既習事項から ○ 活動や体験の中から共感的問いや「なぜ」「どうしたらよいのか」という問題を発見できる。 ○ めあてを解決	○ 具体的で心情のゆれを引き出す学習材を提示する。 ○ 主体的な追求意欲を引き出す学習材を提示する。 ・半分完成の資料提示（作業型資料提示） ・本物との総合的かかわりを大切にする「問題＋解決＋結果のまるごと学習材」の提示 ○ 正解を求める質問でなく，さまざまな考えを引き出す発問。 ・条件を提示して問題解決の知恵に向かわせる発問 ・意志決定や方法を問う判断型の発問 ○ 一人ひとりの思いや気づきを子どもが相互に知り合う場の設定。 ○ 一人一人の子どもの思いや気づきをとらえて，問題の見つけ方にかかわる助言をする。

〈解決の見通しをもつ〉 めあて解決の方法や計画を考える。 ⇩ 〈めあてを追究する〉 めあて解決の方法にそった個人の追究や集団での追究 ↓ （子ども個々の追求） ↓ （集団での追求，吟味） ↓ 表現する（文章，言葉　統計地図，年表，絵図身体） ⇩ 〈振り返る〉 自分の追求活動を振り返る 自分の考えの変容や追求方法のよさに気づく 成就感 充実感 不充実感 新たな問題を見つける ⇩	する方法を自分なりに考えることができる。 ○　めあて解決の方法にそって自分なりに追究できる。 ○　追求結果自分なりの方法で表現し，互いに学び合う。 ○　自分自身の追求結果をまとめ，活動を振り返る。 ○　相互評価を通して自分なりのよさや変容をみつける。 ○　学習をもとに新たな問題をみつける。	○　手段や方法を考える発問を工夫する。 ・「どんなことを調べればめあてを達成できますか。」という内容に関わる発問 ・「どこで，どんな資料をつかって調べますか」という観察・資料活用に関する発問 ○　個々のめあてに応じた多様な活動の場や展開を組織する ・五感を生かした観察，調査活動 ・多様な資料の整備 ・子どもの調べ学習に応じた個と集団の場の保障 ・追究の時間的保障 ○　子どもの姿を見取り，深化発展をうながす発問やことばかけを行う。 ・「どこがうまくいかないのか」という問題点の発見にかかわる発問 ・「どうしたらよりよくなるか」という追求方法の発問 ・追求内容や方法の良い点をほめ，励ます指導的評価 ・「これでよいのかな」というゆさぶりのことばかけ ○　個々の調べ学習を生かした多様な表現活動の場の設定。 ・劇化，動作化等の身体表現 ・具体物を活用する表現 ・数量的，図表的表現 ○　深化，発展をうながす児童相互のかかわり合いの場を設定する。 ・体験に基づく発表 ・理由や根拠を明確にした意見や考えの発表 ○　めあてを達成した充実感や追求のよさを意識する問いかけや場を設定する。 ・自分の活動，考えがどう変わったか。 ・自分が深まったきっかけはなにか。 ・友だちのどのような考えや資料が参考になったか。 ○　学習後も子どもがめあてを追究したり，発展的なめあてをもつことができるような場を設定する ・さらに調べたいこと，不十分なことを話し合う場 ・発展問題の示唆 ・関連事例の教師や子どもによる提示